その 作 でること、 でること、

The Symbiosis Art Festival 2021 Going on a Trip, Getting Ready

2021 年度 共生の芸術祭「旅にでること、その準備」

The Symbiosis Festival 2021 "Going on a Trip, Getting Ready"

出品作家:

アトリエみつしま / Atelier MITSUSHIMA 井口直人 / IGUCHI Naoto 上嶋浩綺 / UESHIMA Koki 勝山直斗 / KATSUYAMA Naoto 西生てる子 / NISHINARI Teruko 古谷秀男 / FURUTANI Hideo

松原日光 / MATSUBARA Hikaru

会場:京都市美術館 別館 第1展示室(1階)

会期:2021年12月9日(木)~12月26日(日)※月曜休館)

時間:10:00-18:00(※最終日は16時まで)

料金:無料

巡回展

会場:市民交流プラザふくちやま 市民交流スペース+ギャラリー

会期:2022年2月16日(水)~2月20日(日)

時間:10:00-18:00 (16日 (水) は13:00~、20日 (日) は17:00まで)

料金:無料

主催:きょうと障害者文化芸術推進機構

協力:社会福祉法人さふらん会、社会福祉法人 大和会 大和高原 太陽の家、Able Art Company、社会福祉法人 久美愛園、アトリエみつしま、社会福祉法人 南山城学園、

就労支援施設 ヴィレッジれん、一般財団法人 たんぽぽの家

会場構成:dot architects 広報デザイン:タナカタツヤ 展覧会企画:art space co-jin

【お問い合わせ】

art space co-jin

art space co-jin (きょうと障害者文化芸術推進機構 事務局) 〒602-0853 京都市上京区河原町通荒神口上ル宮垣町 83 レ・フレール 1 階 Tel & Fax: 050-1110-7655

ごあいさつ

旅にでること。この場所から離れ、見知らぬ土地を歩き、新しい文化や価値、人と出会い、時に迷いなが らも先へと進む。旅はこの世界の多様なあり方と視点をもたらし、この日常を生きる私たちをより豊かに してくれます。

ただ、旅にでることはそれぞれが置かれた状況により、そう容易ではないかも知れません。しかし、物理 的にどこか遠くへ行けなくとも、この場所からまだ見ぬ地を想像することはできる。それは言わば旅にで るための「準備」であり、私たちをここではないどこかへと連れて行ってくれることでしょう。それはこ の現実から逃れるための手段ではなく、この現実を新しいものに作り変えてゆく方法です。

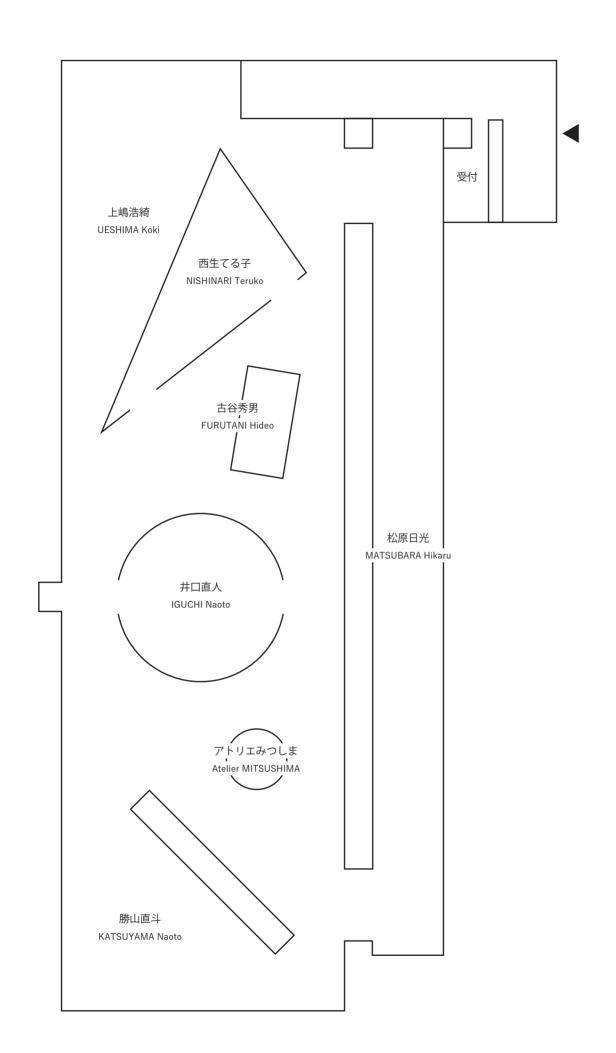
また、私たちの暮らす日常の中に、あるいは共にいる他者との間にも旅を発見することは可能です。私た ちは同じ時代に生まれながら、違う場所や環境、身体、価値観や経験を持って生きている。同じものを見 ながらも同じように感じることはできない。それぞれによって見出された世界は、旅によって得られる経 験にも勝るとも劣らない多様な表現として現れている。そう考えると、私たちの暮らす日常の中には、驚 きと発見が満ちていることに気付かされることでしょう。

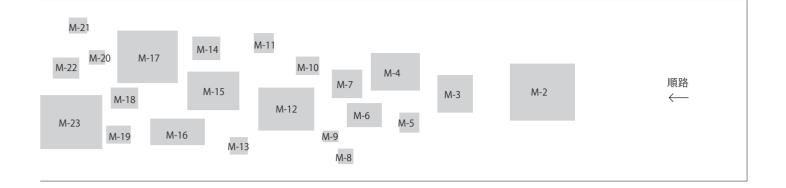
本展覧会では、「旅にでること、その準備」と題し、京都府内外の7組の障害のある方の表現を紹介します。 30 年にわたるブラジルでの記憶を元に絵を描く古谷秀男。自身の想像した架空の国を精密に描写する上嶋 浩綺。日々の時間を痕跡としてスケッチブックに描き出す西生てる子。コピー機を駆使して、自らのポー トレートを制作し続ける井口直人。全盲の美術家、光島貴之がオーナーを務め、自身の制作だけにとどま らない様々な活動を行う、アトリエみつしま。自室の壁紙を唾液によって剥がし、壁画を制作する勝山直斗。 旅先でみた景色や自宅の花をモチーフに鮮やかな色彩の刺繍糸で制作する松原日光。

彼ら、彼女らの表現はそうしたこの世界の多様さと豊かさを私たちの内に改めて発見させてくれるはずで す。それは、この場所から見える景色を新しく、眩いものに変え、この先に来るべき未来へと繋がってゆ くのではないでしょうか。

最後になりましたが、本展覧会にご協力いただきました各作家の皆様、並びにご親族、各施設、ご関係者 の皆様に謹んでお礼申し上げます。

きょうと障害者文化芸術推進機構





M-1

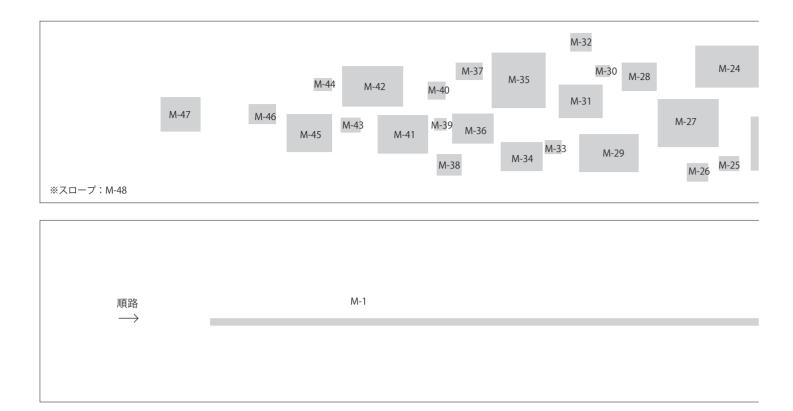
M-1 松原日光 資料写	真
--------------	---

- M-2 《軽飛行機》 制作年不明 | 布、糸
- M-3 《花》 2006 | 布、糸
- M-4 《飛行機》 制作年不明 | 布、糸
- M-5 《馬》 制作年不明 | 布、糸
- M-6 《貨物船》 1994 | 布、糸
- M-7 《雲と軽飛行機》 制作年不明 | 布、糸
- M-8 《ひまわり》 1993 | 布、糸
- M-9 《ラクダ》 1992 | 布、糸
- M-10 《ヘリコプターと雲》制作年不明 | 布、糸
- M-11 《ヘリコプター》 1995 | 布、糸
- M-12 《花博》 制作年不明 | 布、糸
- M-13 《モグラ》 制作年不明 | 布、糸
- M-14 《飛行機と雲》 2004 | 布、糸
- M-15 《働く船》制作年不明|布、糸
- M-16 《チューリップ》 制作年不明 | 布、糸
- M-17 《ききゅう》 制作年不明 | 布、糸
- M-18 《シーサー》 1995 | 布、糸
- M-19 《花》2009 | 布、糸
- M-20 《庭の花》制作年不明 | 布、糸
- M-21 《ひこうせん》 1993 | 布、糸
- M-22 《花》2007 | 布、糸
- M-23 《船の軌跡》 2004 | 布、糸
- M-24 《潜水艦》 制作年不明 | 布、糸

- M-25 《やぎ》 1992 | 布、糸
- M-26 《花》 1994 | 布、糸
- M-27 《あずさ川(または上高地》

制作年不明|布、糸

- M-28 《ヘリコプターと雲》 制作年不明 | 布、糸
- M-29 《いろいろの船》 制作年不明 | 布、糸
- M-30 《ヘリコプター》 1994 | 布、糸
- M-31 《LNG タンカー》 制作年不明 | 布、糸
- M-32 《プロペラ機》1993 | 布、糸
- M-33 《ろば》 1992 | 布、糸
- M-34 《馬と木》制作年不明 | 布、糸
- M-35 《ひまわり》 制作年不明 | 布、糸
- M-36 《むつ》 制作年不明 | 布、糸
- M-37 《はたらく船》 1996 | 布、糸
- M-38 《かめ》 2002 | 布、糸
- M-39 《ひつじ》 1992 | 布、糸
- M-40 《庭の花》 1994 | 布、糸
- M-41 《山と雪》 1996 | 布、糸
- M-42 《プロペラ飛行機》 制作年不明 | 布、糸
- M-43 《流氷》 1999 | 布、糸
- M-44 《はたらく船》 1996 | 布、糸
- M-45 《ヘリコプターと雲》 制作年不明 | 布、糸
- M-46 《しらせと流氷》 1995 | 布、糸
- M-47 《雲と飛行機》 制作年不明 | 布、糸
- M-48 《雲と飛行機》 制作年不明 | 布、糸



松原日光 / MATSUBARA Hikaru

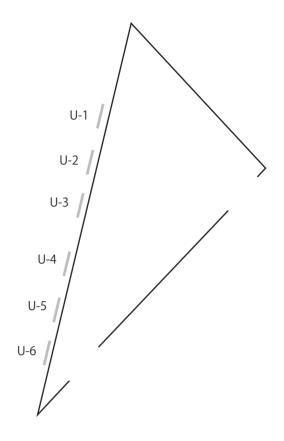
1975年生まれ、京都市在住。

高校2年生の時に母の勧めで刺繍を始め、手先が器用だったこともあってすぐに技術を習得し、独創的でカラフルな作品を作るようになった。古い手芸用品店から入手したという棚には400色ほどの糸がストックされ、そこから繊細な違いの色を選んで使う。モチーフは花、動物、乗り物、風景など。多趣味で旅行好きな両親と、2ヶ月に一度ぐらいの頻度で出かけるという家族旅行で出会った景色もよくモチーフになる。

自宅の庭には大きな白木蓮をはじめ季節ごとに咲く花や木が植えられ、日々の中に新しい出会いをもたらしている。 彼のいつもの制作場所である二階窓際からは、庭の緑と外の風景が一望できる。モチーフの乗り物は彼が旅行中に実際に乗ったものもあるが、テレビで見たヘリコプターや図鑑で見た石油掘削船など、乗ることの難しいものもしばしば描かれる。そこには、乗りたいけれど乗れないものへの憧れが色鮮やかに現れているようである。家族と行った遠くの旅の景色や、身近な庭の草花、乗ることのできない乗り物、さまざまな距離感を伴った松原の思い浮かべる世界が、彼の縫う糸によって物語性を含んだ豊かな表現として紡ぎ出されている。

本展覧会では、初期から近作までの多数の刺繍作品とともに、長年撮りためられた家族旅行の写真を併せて展示する。彼の作品は閉ざされた世界の中で生まれてくるのではない。日々の家族との生活や、旅先での体験からその表現が生まれていることを感じて欲しい。

- U-1 《 萌花共和国地図 》 2019 | 紙、ボールペン、色鉛筆
- U-2 《 小都中央国地図 》 制作年不明 | 紙、ボールペン、色鉛筆
- U-3 《 時苺火山諸島地図 》 2019 | 紙、ボールペン、色鉛筆
- U-4 《 肌実共和国地図 》 2020 | 紙、ボールペン、色鉛筆
- U-5 《八女少女国地図》 2021 | 紙、ボールペン、色鉛筆
- U-6 《 蜂蜜三島国地図 》 2021 | 紙、ボールペン、色鉛筆



上嶋浩綺 / UESHIMA Koki

所属: 就労支援施設 ヴィレッジれん 2001 年生まれ、京都府在住。

入念に作りあげた設定と自作の手引きを元に、架空の都市の地図を緻密に描いている。公開することなく大切にしているその手引きには、お気に入りの市販の地図を元に制作された作図の手順が記されており、始めに国名を決め、海岸線を描くなどの工程を経て、最後に色鉛筆での着彩を行うなどの全 16 工程が存在する。また、その国の住人についても細かく構想されたノートもあり、地図中には描かれてはいない詳細な設定があるようだ。

作品の隅には「1cm は 2km」と書かれており、これによりこの地図が 1/200,000 の縮尺で表記されていることがわかる。縮尺表記に倣えば「萌花共和国地図」は南北に 100km、東西に 65km ほど大きさであり、中心に湖を持つことから、現実世界での滋賀県に相当するサイズを持つ島国であることが想像される。

ここに描かれた想像の国々を直接見ることができるのは上嶋だけである。逆に言えば、上嶋が描くことによってのみ、私たちが訪れることができる想像の国がこの現実に存在するということでもある。彼の想像の中には果てしなくその国や都市、住人が、私たちの暮らすこの世界の解像度と同じほどに続いているのだろう。現在は B4 サイズを 40 枚張り合わせて完成する「広姫愛国地図」と名付けられた 2m×3m ほどの大作を制作中である。

地図は現在地を教えてくれると同時に、ここではない場所と現在地が繋がっていることを教えてくれる。幼い頃、地図を見ながら胸をときめかせた人も少なくないのではないだろうか。上嶋の作品を眺めながら、彼の見る世界へと想像の旅にでかけてみてはいかがだろうか。

N-1

《タイトル不明》

制作年不明|スケッチブックにオイルパステル

N-2

西生てる子 資料映像

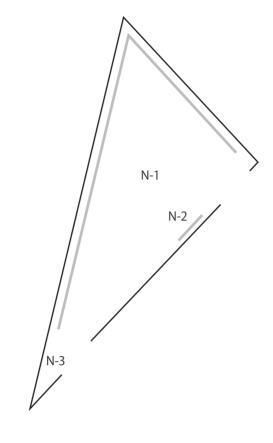
19分44秒

制作: art space co-jin

N-3

西生てる子 作品資料

(35mm 版 ポジフィルム)

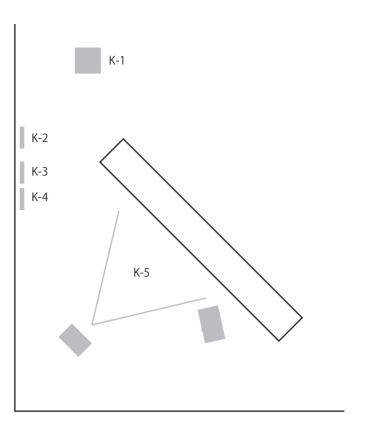


西牛てる子 / NISHINARI Teruko

所属:社会福祉法人 南山城学園 1955 年生まれ、京都府在住。

スケッチブックにゆっくりとあわてることなく、ほんの少しだけ線を描いたあと、次のページをめくり、また少しだけの線を描く。さらにページをめくり、同じことを繰り返して、スケッチブックの最後までたどり着くと、折り返し最初のページへ向かい同様に描き進んでゆく。いったりきたりを繰り返す中で、線は重なり手で擦れながら集合体となる。何度もめくられ続けたページは折れ曲り、次第に傷んで破れてしまうが、彼女は気に留めることはなく小さくなっていくオイルパステルを握り、その歩みを繰り返す。

彼女の暮らす、南山城学園は緑豊かな場所にある。敷地内にある粘土室からは、広い芝生と大きな木々が見え、その名の通り沢山の粘土と、様々な画材と作品が所狭しと並んでいる。そこで彼女は 15 年あまりオイルパステルを握りスケッチブックに向かっていた。その時間は彼女の生活と密接に寄り添っており、誰にも邪魔をされることのない営みを奔放に慈しんでいるようであった。それゆえに彼女の作品には完成としての終わりはなく、数ヶ月間いったりきたりと一緒に歩んだスケッチブックを、彼女自ら手放すことはない。余白や耐久性に限界を感じた職員から新しいものが差し出された時、そこではじめて替わりのスケッチブックを静かに開き、そのまま、また新たな歩みをはじめる。その終わりのない営みは、まるで長い旅を続けているかのようで、描き古されてぼろぼろになったスケッチブックの数々は、彼女だけに流れる時間を閉じ込めているようである。



K-1

勝山直斗 作品資料

咀嚼されて天井に貼り付けられていた紙

素材:紙、唾液

K-2 ∼4

勝山直斗 資料写真

障害児入居施設 久美学園 215 号室

素材:インクジェットプリント

撮影: art space co-iin

K-5

勝山直斗 資料映像

プロジェクター:5分12秒

モニター:5分53秒

出演:勝山直斗

長久保さゆみ(障害児入居施設 久美学園)

取材日時:2021年10月20日(水)協力:社会福祉法人久美愛園 撮影:編集:art space co-iin

勝山直斗 / KATSUYAMA Naoto

所属:社会福祉法人久美愛園 福祉型障害児入所施設 久美学園 2006 年生まれ、埼玉県在住。

画材が手元になかった時に、自室の壁を唾液で湿らせて壁紙を剥がすという行為によって、生き物や乗り物、模様などを描く壁画の制作を始めた。また、剥がされた壁紙は、口に含み咀嚼された後に、天井に投げつけ貼り付けられている。壁紙以外の紙も噛む癖があり、色とりどりの紙によって天井は彩られており、床を除く部屋の全ての面が勝山の表現によって埋め尽くされている。また、部屋以外にも階段の踊り場などの天井高のある場所を含む、多くの場所に散見される。

画材がない状況によって壁紙を剥がす制作行為が生まれたのであれば、手が届かないという状況でいかに表現を行うかという勝山の創作意欲が、この咀嚼された紙を投げて貼り付けるという方法に至らせたのだろうか。普段から歌を歌いながら絵や工作に楽しそうに取り組む姿からも、彼にとって作るという行為が日常の中にある自然な営みであることが感じとれる。

入居する施設は、数年に一度の居室の移動を行うため、2021年現在では6部屋に渡り壁画の部屋が存在する。施設が18歳までの入居という制約があるため、現在15歳の勝山はあと3年間で当施設をでなければならない。補修に伴い、この壁画をどう保存するのかを建築業者も交えて検討したこともあったようだ。

スマートフォンなどでどこでもイメージを手に入れることができるこの時代の中で、その場所に行かなければ見ることができない壁画という手法、そしてそれが施設内の個人の居室にて行われている事実は、公私、イメージと場所、身体性などへの多くの示唆を私たちに与えてくれることだろう。

本展覧会では、壁画を映像、写真資料として紹介するほか、実物の咀嚼された紙の玉を展示している。

A-1 アトリエみつしま 対話鑑賞記録

制作: art space co-jin

- A-2 《 まなざし No.2 通りすぎる 》 2021 | オイルパステル、釘、刺繍糸、カンヴァス
- A-3 《 まなざし No.1 視線を感じたい 》 2021 | オイルパステル、モデリングペースト 釘、刺繍糸、カンヴァス
- A-4 <u>アトリエみつしま インタビュー</u> 2021 | 制作: art space co-iin
- A-5 《 まなざし No.4 笑い声がみえる 》 2021 | オイルパステル、ラインテープ、刺繍糸 シール、キャンバス
- A-6 《 まなざし No.5 まちが見ている 》 2021 | オイルパステル、ラインテープ、刺繍糸 シール、キャンバス
- A-7 《 まなざし No.3 窓の記憶 》 2021 | オイルパステル、カッティングシート ラインテープ、刺繍糸、キャンバス
- A-8 《 夢のワルツ 》 2011 | オイルパステル、カッティングシート、ラインテープ シール、木製パネル

A-1 A-1 A-2 A-7 A-6 A-5 A-4

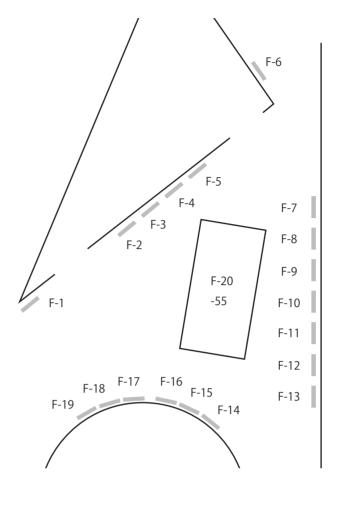
アトリエみつしま /Atelier MITSUSHIMA

2020年4月から活動開始、京都府在所。

京都、大徳寺のそばにある「アトリエみつしま」のオーナーを務める光島貴之(1953-)は、10歳の頃に失明した。彼はその後、大谷大学文学部哲学科を卒業し、鍼灸院を開業。鍼灸を生業としながら、1992年より始めた粘土造形を皮切りに、"さわっておもしろいものは、見てもおもしろい"をコンセプトに製図用ラインテープとカッティングシートを用いた「さわる絵画」の制作をはじめ、近年では釘を用いた木製レリーフやオイルパステルを使用した絵画の制作など多岐にわたる作品発表を続けてきた。

昨年の春よりはじまったアトリエみつしまの活動も、見えない人・見えにくい人・見える人が隔たりなくアートを楽しめる場所づくりを目指し、ギャラリーでの作品展示だけではなく、トークイベントやワークショップ、見えない人と見える人が作品鑑賞を行う対話鑑賞会など、様々な取り組みを行っている。

本展覧会では光島の作品に加え、彼とアトリエスタッフやその仲間と共に、本展出展作家の作品について対話鑑賞会を行い、その音声を展示する試みを行っている。全盲の彼を囲み作品鑑賞を行うには、まずは晴眼者の言葉が必要となる。晴眼者は目の前にある作品を言葉にして彼に伝えようとした時、最初は得ている情報の前提が違っていることに戸惑う。しかし、言葉を交わす中で気づきが生まれ、目の前にある作品の新しい一面が浮かび出てくる。その経験に触れた時、私たちはアトリエみつしまの目指す「隔たりなくアートを楽しむ」ことの魅力に気付かされるとともに、探求する彼らの陰日なたのない真摯さを感じるのではないだろうか。



- F-1 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-2 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-3 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-4 《バレーボール》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-5 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-6 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-7 《タイトルなし》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-8 《タイトルなし》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-9 《タイトルなし》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-10 《タイトルなし》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-11 《タイトルなし》 制作年不明|紙、ペン
- F-12 《タイトルなし》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-13 《タイトルなし》 制作年不明|紙、ペン
- F-14 《タイトルなし》 制作年不明|紙、ペン
- F-15 《タイトルなし》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-16 《タイトルなし》 制作年不明|紙、ペン
- F-17 《タイトルなし》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-18 《ハムレットのイチイの樹》

制作年不明|紙、ペン

F-19 《タイトルなし》 制作年不明 | 紙、ペン

F-20~55 次ページ記載→

古谷秀男 / FURUTANI Hideo

所属:社会福祉法人大和会 太陽の家 1941 年生まれ、奈良県在住。

古谷秀男は 16 歳からの 33 年間、開拓移民として家族 4 人でブラジルへ渡り農作業を行っていた。49 歳で帰国した後は料理屋で働くが、脳梗塞による後遺症で右半身に麻痺が残ることになった。その後、1997 年から奈良県にある大和高原太陽の家に入所し、制作活動を行うようになり、現在に至る。

古谷は幼き日々に過ごした日本の姿と、ブラジルの風景や農場生活に思いを馳せながら、牧歌的な風景を自身の世界観で捉え丹念に描き込んでいる。そこには、この地球で暮らす私たち人間の営みと共に動物や植物、あらゆる生き物が分け隔てなく綿密に描かれており、私たちが人間以外の多くの存在と共に生きていることを実感させてくれる。なかでも古谷は鳥に興味を寄せ、多くの作品には多種多様な鳥が登場することにも注目してほしい。

作品の制作スピードが早く、還暦を迎えてから制作活動を始めたにも関わらず、その作品数は今では 300 点を超えている。初期の作品にはラメ入りのペンを使用した作品が多く、望郷を思う古谷の気持ちが今も輝きを失わず絵画の中に描き留められているようであり、私たちにノスタルジックな幸福感をもたらしてくれることだろう。

この懐かしさをどう言葉にすればよいのだろうか。実際の風景を私たちは知らないが、大切な記憶が呼び起こされるような感覚。それはおそらく、私たちがかつて、幼き頃に経験したはずであろう、この世界の中で多くの存在と共に生きているという無意識のうちに享受していた実感への郷愁ではないだろうか。

国や文化、時間を飛び越えて古谷の目に映るその世界をぜひ感じとっていただければ幸いである。

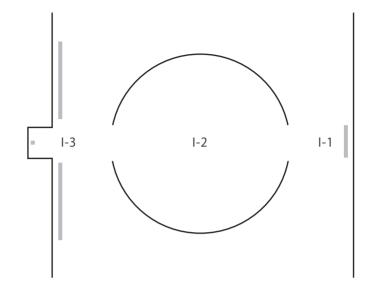
古谷秀男 / FURUTANI Hideo | M20-55 (展示台)

F-20 F-21 F-22 F-23 F-28 F-29 F-30 F-3	
	31
F-24 F-25 F-26 F-27 F-32 F-33 F-34 F-3	35
F-36 F-37 F-38 F-39 F-44 F-45 F-46 F-47 F-48 F	F-49
F-40 F-41 F-42 F-43 F-50 F-51 F-52 F-53 F-54 F	F-55

F-20	《タイ	トル不詳》	2007 紙、	ペン
------	-----	-------	---------	----

- F-29 《松 日本の風景》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-30 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-31 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-32 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-33 《タイトル不詳》 制作年不明|紙、ペン
- F-34 《タイトル不詳》 制作年不明|紙、ペン
- F-35 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン F-36 《タイトルなし》 制作年不明 | 紙、ペン
- -- " '-- " '-- "
- F-37 《タイトルなし》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-38 《タイトルなし》 制作年不明 | 紙、ペン

- F-39 《タイトル不詳》 制作年不明|紙、ペン
- F-40 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-41 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-42 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-43 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-44 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-45 《タイトル不詳》 制作年不明|紙、ペン
- F-46 《タイトル不詳》 制作年不明|紙、ペン
- F-47 《タイトル不詳》 制作年不明|紙、ペン
- F-49 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-50 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-51 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-52 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-53 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-54 《タイトル不詳》 制作年不明 | 紙、ペン
- F-55 《タイトル不詳》 制作年不明|紙、ペン



I-1

井口直人 資料映像

2021 | 4分16秒

映像提供:社会福祉法人さふらん会 さふらん生活園

撮影·編集:art space co-jin

1-2

《無題》

2016-2021 | 紙、インク、複写機

I-3

《腕章》

制作年不明

カラーコピー紙、セロテープ、輪ゴム

井口直人 / IGUCHI Naoto

所属:社会福祉法人さふらん会 さふらん生活園 1971 年生まれ、愛知県在住。

行きつけのコンビニや通所する施設のコピー機のガラス面に身の回りのものを配置し、自らの顔を押し付けてプリントする、いわゆる「自撮り」が彼の日課となっている。懸賞シール、袋、缶、時計、電卓などのモチーフは井口のお気に入りであり、懸賞シールは彼が施設内で行う軽作業である空き缶の分別中に手に入れたものである。

この行為は、18 年ほど前に行われた所属施設の「楽しいこと探し」と呼ばれる時間の中で始まり、試行錯誤を繰り返しながら毎日欠かすことなく現在まで続いており、現在では地域の日常の光景として周知を得るようになった。コピー機の設定を操作し、特定の色を選択し2色で印刷する、拡大縮小印刷、配置したものを印刷中に揺らすなどの手法や、施設職員の身体や過去に出力したコピー用紙が加えられることもあり、実像と虚像が入り混じることで不思議な画面の奥行きを生み出し、独自の世界観が表現されている。

また、このコピーは、その後井口の手によってコラージュの素材として扱われ、自身が身につける「腕章」へと形を変えることもある。幼い頃にはインスタントラーメンの中華三昧の空袋や、キリンビールの図柄を衣服に貼り付けていたことから、嗜好品を携行することへの愛着が感じられる。

井口の行為は、私たちの知るコピー機が彼の作る世界への小さな窓としてつながっているような感覚をもたらしてくれる。それは井口が長年施設職員や周囲の人々と培ってきた関係によって獲得した確かな表現の技術であり、コピー機を通じてこの日常からパラレルな世界に潜り込むようなユーモアを携えながら、センセーショナルな景色をこの世界に写し出している。